

自学力を育む家庭学習の研究

—マイゴールチャレンジの実現に向けて—

南九州市立宮脇小学校

教諭 小原 武

目 次

1	研究主題の設定理由	
(1)	本学級の実態	2
(2)	鹿児島県の動向	2
2	研究の構想	
(1)	研究の仮説と具体的な取組	2
(2)	仮説検証のための具体的な手立て	3
3	研究の実際	
(1)	家庭学習を通して身に付く自学力	3
(2)	実践の概要—マイゴールチャレンジ中心の学び—仮説Ⅰの検証	4
(3)	ICT活用—主体的な取組につながる支援— 仮説Ⅱの検証	7
4	研究のまとめ	
(1)	取組の検証—アンケート調査の結果から—	9
(2)	成果	10
(3)	課題	10

【引用・参考文献】

- アクティブラーニングが絶対成功する！小中学校の家庭学習アイデアブック
(2017) 田中博之, 明治図書
- 「マイゴールチャレンジ」鹿児島県教育委員会 HP
<https://www.pref.kagoshima.jp/ba04/kyoikubunka/school/teichaku/6090/h22katei6090.html>

1 研究主題の設定理由

(1) 本学級の実態

VUCA の時代を迎える現代社会において、認知的能力としての学力だけではなく、「粘り強く取り組む力」や「自らの学びを調整する力」など、主体的に学習に取り組むために必要な非認知能力の重要性が叫ばれてきている。本校では、一昨年度から家庭で取り組む学習のことを、「宿題＝教師が一律に児童に取り組ませるもの」ではなく、「家庭学習＝児童自ら自分の学びのためにするもの」と捉え、その改善を試みてきた。しかし、今年度担任する6年生12人は、4月初めの学活で家庭学習について確認をしたものの、「希望（宅習帳：日記、漢字練習、自学ノート）」の児童間の取り組み方に大きな差が見られた。

毎日決められたことだけではなく、自分の興味・関心に応じて工夫して取り組める児童がいる一方で、毎日取り組むこと自体が難しかったり、取り組めたとしても、間違いだらけのものがあったりした。

(2) 鹿児島県の動向

令和7年7月、鹿児島県教育委員会は家庭学習の合言葉を「家庭学習 60・90 運動」から、「マイゴールチャレンジ（家庭学習 MGC）」と変更する通知を発出した。鹿児島県教育委員会が打ち出した「マイゴールチャレンジ」の内容は、大まかにまとめると以下の3点である。

① 家庭学習の質の向上と主体的な学びの促進

従来の「60・90 運動」（学習時間の確保）から、児童生徒が自ら目標・内容・方法を決めて取り組む「マイゴールチャレンジ」へ転換し、学習の質を重視する家庭学習を推進する。

② 学校と家庭の連携による学習の一貫性の確保

「学習者主体の授業」とつながる家庭学習を実現するために、学校と家庭が連携し、児童生徒の主体的な学びを支援する体制づくりが求められる。

③ 発達段階に応じた支援とICT活用の推進

児童生徒の発達段階に応じて、目標設定・計画・振り返りを支援し、ICT 端末の活用によって場所や時間にとらわれない学びを可能にする。

担任する児童の実態を鑑みると、県の方針転換は学級の課題を解決するうえで重要な視点である。そこで、「マイゴールチャレンジ」への取組を通して、児童たちが自らの学びを調整したり、粘り強く取り組んだりする、自ら学ぶ力（以下、自学力）を育てていけると考え、研究主題を「自学力を育む家庭学習の研究」と設定した。

2 研究の構想

(1) 研究の仮説と具体的な取組

研究主題で目指す児童の姿を達成するため、次の研究仮説を設定した。

仮説 I

児童が授業と家庭学習に主体的に取り組めるような働き掛けや工夫を行うことで、自ら学ぶ力が高まり、単元の目標とする資質・能力が身に付くのではないかと考える。

仮説 II

ICT を活用した家庭学習に取り組ませることで、自ら学ぼうとする姿勢や家庭学習に対する意義を実感できるのではないかと考える。

(2) 仮説検証のための具体的な手立て

研究の仮説を検証するため、次の手順で研究を行う。

- ① 先行研究による「自ら学ぶ力」を高める手立ての整理と実践の構想
- ② ①を生かした家庭学習の実践
- ③ アンケート調査による自学力の高まりについて検証

本研究では、自学力を高めるために「家庭学習への取り組み方の意識化」に焦点を当てる。そのために、家庭学習を通じた自ら学ぶ力の育成について、その理論や実践をまとめた田中博之(2017)を参照する⁽¹⁾。その成果を基に、算数科の複数の単元を通して実践を行い⁽²⁾、中長期的なスパンでの取組によって自学力がどう変容したか検証を行う⁽³⁾。

3 研究の実際

(1) 家庭学習を通して身に付く自学力

田中(2017)は、家庭学習について「やらされる家庭学習」から「自ら進んで取り組む家庭学習」へ転換する必要性を述べ、R-PDCA サイクルを通して自らの学習と生活を改善していく力、すなわち自己マネジメント力を育てていくことを呼びかけている。R-PDCA サイクルの具体的な内容は、次の表1のとおりである。

表1 「家庭学習における R-PDCA サイクルの特徴」 田中(2017) p16 より

段階	基本的特徴	具体的活動例
診断 R(Research)	自分の学習と生活の在り方に関する長所と短所を踏まえて、その成果と課題についてデータに基づいて客観的に捉える。	○「家庭学習力アンケート」を用いて自己診断する。 ○「家庭で過ごした時間の円グラフ」を作成して時間配分を自己診断する。 ○家庭での学習や生活の問題点や課題を整理して書き出す。
計画 P(Plan)	家庭での学習と生活の在り方を改善するための計画を、項目別に時間配分を明確にして作成する。	○改善ポイントを目標にして書き出し、スローガンにして部屋に張り出す。 ○学習改善計画を作成する。 ○生活改善計画表を作成する。
実施 D(Do)	計画実施期間として2週間程度をかけて、作成した改善計画を実施してみると同時に、その記録を付けておく。	○計画実施表に記録を付けていく。 ○毎日、実施状況のミニ感想文を書く。 ○必要に応じて、実施記録を保護者や教師に見せてアドバイスをもらう。
評価 C(Check)	これまで行ってきた診断・計画・実施の在り方を振り返って、実施状況の記録を基にしながら実施期間内の改善の成果と課題について整理する。	○「家庭学習力アンケート」2回目を実施する。 ○「改善評価シート」に記入する。 ○成果と課題を分けて整理する。 ○課題の原因を考えてまとめる。 ○評価結果を整理してレポートを書く。
改善 A(Action)	以上の評価結果を基にして、さらなる改善計画を立てて実行する。時間的に実行ができない場合には、次年度に引き継ぐ。	○さらなる改善計画を立てて実施する。 ○「改善計画表」を作成する。 ○改善のための自己目標を明確にする。 ○自分なりの個性的な内容や方法を組み入れるように配慮する。

この R-PDCA サイクルを進めていく上で重要なのが、家庭学習や生活の在り方をとらえる視点である。田中(2017)は、次の8つの領域と24の項目で家庭学習力を設定した。

表2 「家庭学習力モデルの領域と項目」田中博之(2017) p18 を基に筆者作成

No.	領域	項目	No.	領域	項目
1	学習習慣	宿題, <u>習慣</u> , 復習	5	自己コントロール力	苦手, <u>集中</u> , 克服
2	生活習慣	<u>時間</u> , 睡眠, 食事	6	自己マネジメント力	記録, 反省, <u>改善</u>
3	自律心	準備, 整理, <u>自律</u>	7	生活学習力	社会, 辞書, 読書
4	自己学習力	計画, 目標, 教え合い	8	自己成長力	<u>評価</u> , 得意, 夢

この24項目について、総合的な学習の時間(10時間)を使って継続的に家庭学習の振り返りと改善に取り組むことを提案している。この家庭学習について、田中(2017)の研究は、児童がやらされるのではなく、自ら考えて取り組んでいけるという点で、マイゴールチャレンジの理念と合致する。ただし、これら全てをそのまま自らの学級で進めていくのは、時数や実態にそぐわないところもある。特に、この家庭学習力モデルは家庭学習だけではなく、生活のあり方までを含めたものとしているため、本学級の実態に即し、家庭学習の焦点化した自学力を設定する必要があると考えた。

(2) 実践の概要—マイゴールチャレンジ中心の学び—仮説Iの検証

そこで、家庭学習力の領域と項目を参考に、本研究では自学力を次の6つに設定した。

① 自分で始める	③ 内容を考える	⑤ きちんと確かめる
② 時間を決める	④ 方法を工夫する	⑥ 字を丁寧に書く

「⑥ 字を丁寧に書く」を付け加えたのは、授業におけるノートや宅習帳における児童の実態から、書字指導の必要性を感じたからである。以上の6つの力を高めるために、R-PDCA サイクルに実践を位置づけた自学力を高める取組を行うことにした(図1)。以下では、その取組について、目標設定、学習者主体の授業、振り返りシート、家庭学習におけるICTの活用 の4点について記していく。

表3 実践の過程

過程	単元	内容
R(調査)		学級PTAでの呼びかけ
P(計画)	小数と分数	目標設定
D(実施)		学習者主体の授業
C(評価)		テスト
A(改善)		テスト返却→振り返り
P(計画)	円の面積	目標設定
D(実施)		学習者主体の授業
C(評価)		テスト
A(改善)		テスト返却→振り返り
P(計画)	立体の体積	目標設定
D(実施)		学習者主体の授業
C(評価)		テスト
A(改善)		テスト返却→振り返り
R(調査)		2学期全体の振り返り



図1 「実践の全体像」

(ア) 目標設定—マイゴールの意識—

マイゴールチャレンジの理念を達成するために、単元の第1時には、単元テストを行う日時と単元全体を見通す学習内容を示す。児童は、その内容とこれまでの自分の取り組み方から、この単元におけるマイゴール、つまり目標点数の設定を行う。

次の板書は、「立体の体積」の第1時の板書である。単元を通して獲得する概念（柱の体積＝底面積×高さ）について学んだ後、学習内容と家庭学習で行う内容を把握し、児童たちは目標をノートに記す。

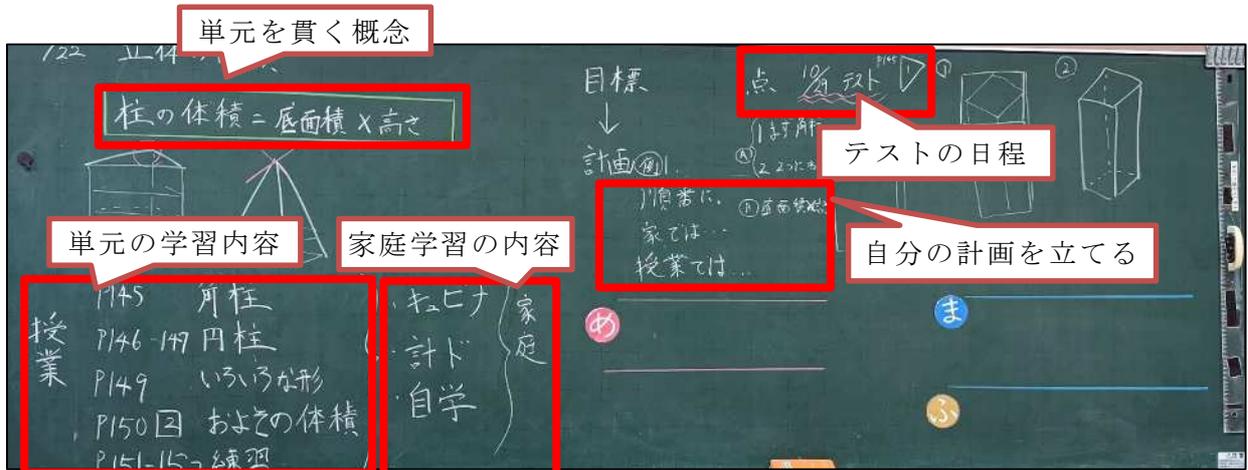


図2 第1時の板書

(イ) 学習者主体の授業—単元内自由進度学習—

小数と分数の混ざった足し引きかけ割の計算ができるようになるう！

	チェック	練習	大事なこと、気をつけたいこと
①分数と小数の足し算引き算	p118	p122 1、2	
②分数と小数の掛け算割り算	p118-119	p122 3	<ul style="list-style-type: none"> ちゃんと約分をする。 小数から分数にするときに間違えないようにしたい。
③単位量あたり	p120 1	ドリル 1-1	<ul style="list-style-type: none"> 割り算は割り算で計算が通うからちゃんとみながらする。
④割合	p120 1、2	ドリル 1-2、3	もとと比べると割合を考えながらする。
⑤倍の計算(分数倍)	p126-127	ドリル 2	もとと比べると割合をどのやつを求めないといけないのかわちゃんと見る。

めあてを書く→チェック問題を解く→先生にOKをもらう→「大事なこと」を書く→練習をする

図3 学習計画シート



3つの単元を通して児童たちは、第1時を除いた時間を単元内自由進度学習で取り組んだ。児童たちは、ロイロノートの学習計画シートを活用する。シート下部には、自由進度学習の進め方が示してあり、予め示された「チェック」の問題に合格したら、練習→振り返り、次の学習へと進んでいく。

図3は「少数と分数の計算」の学習計画シートである。大事なこと、気を付けたいことを右側に記していくことで、振り返りを通じた学習内容の定着を図った。

児童は、教科書に載っている順番通りに進めたり、「学習内容①→まとめの練習→学習内

容②→まとめの練習」のように適宜自分の出来を確かめたりしながら、自ら学習を進めていった。

(ウ) 宅習帳への取り組みせ方

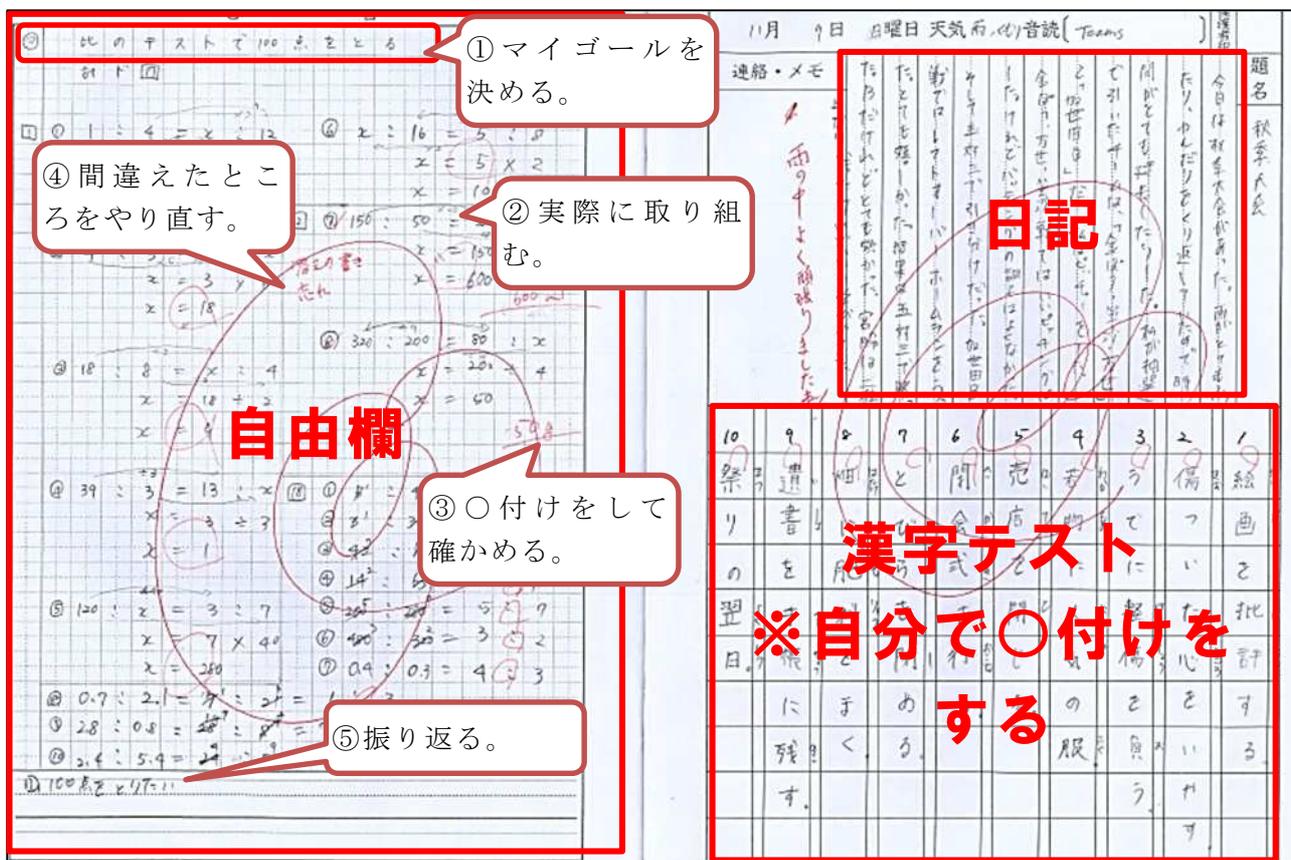


図4 児童の宅習帳の一例

宅習帳は、図4のようなレイアウトで取り組ませた。右ページは、日記と漢字学習、左ページは自由に取り組めるエリアである。自由エリアでは、5つの手順[①一番上に「マイゴール」を書かせることで、目標の意識化を図る。②目標に向けて実際に取り組む。③○付けをして、正誤を確かめる。④間違えたところがあればやり直す。⑤振り返りを書き込む。]で取り組むルールを設定した。本研究では算数を事例として挙げたが、どの教科、内容に取り組むかは児童が自由に選べるようにした。

(エ) 振り返りシート

単元テスト後、児童にテストを返却した後は、1単元の学習の取り組み方を振り返るアンケートを実施し、その結果を反映した振り返りシートに取り組ませた。次ページの図5は、振り返りシートの1例である。

一番上には単元テストの点数、その次に全6つの自学力に対する児童の自己評価の結果がリーダーチャートで示し、下部には学習内容に対する振り返りと、自らの学び方(家庭学習の進め方)に対する振り返りの2つに取り組ませた。さらに、保護者から児童の振り返りに対してコメントしてもらうことで、自学力を高める自らの学び方への前向きに取り組めるようにした。

算数の学習 振り返りシート

「小数と分数の計算」テスト 〇〇点 (平均82点)

番号	2	名前	〇〇
知識・技能	〇〇点	思考判断表現	〇〇点

テストの振り返り (できたことと、できなかったこと)

確かめて、細分ミスをおくせた。けれど、自分で問題の意味がしっかりわかってなかったりした。学び方は、時間を決めてすることが出来なかった。

— あなたの点数 — — 高学年平均 —

自分で始める	4.04	3.00
時間を決める	2.77	2.77
内容を考える	3.11	2.77
方法を工夫す	2.77	2.77
確かめる	3.42	2.77
正しく書く	3.08	2.77

これから頑張りたいこと、次の学びに生かしたいこと

ここからは、時間を決めて、学習をがんばりたい。50分から1時間はがんばりたい。

家の人から

確かめはしっかりできているので、学習の時間をしっかり決めて取り組んでほしいです。😊(頑張ろう!!)

6つの自学力を自己評価

「教科の学び」と「自らの学び方」を振り返る。

次の学習に向けて頑張りたいことなど

保護者からのコメント

図5 振り返りシートの例

(3) ICT活用—主体的な取組につながる支援— 仮説2の検証

これまで述べてきた自学力を高める取り組みには、ICTの活用が不可欠である。例えば、ロイノートアンケート機能や学習計画シートは、一人一人の見取りにかけ時間を確保することにつながる。ここでは、児童が主体的に取り組んでいくために活用した2つの方法を中心に取り上げる。

(7) AI型教材 Qubena(以下キュビナ)

キュビナは、今年度から本校で利用が可能になった学習ドリルである。担任は、キュビナに登録されているドリルに取り組ませることができる。キュビナには、毎時間の最後5分で学習内容の確かめとして取り組ませたり、授業初めに前時の復習として取り組ませたりする方法がある。本研究ではこのキュビナを、家庭学習を中心に組み合わせた。教師は、図6の画面のように児童の取組を把握できる。



図6 キュビナ「教師用画面」

(4) Teams「ラーニングアクセラレータ」

マイクロソフト社が提供する Teams は、コミュニケーションツールとして校務などに活用されている。この Teams の機能に、ラーニングアクセラレータがある。ラーニングアクセラレータとは、教育支援機能の一つで、音読の聞き取り判定や算数の問題など、児童が家庭で取り組む課題を提供することができる。これまで筆者は、児童に家庭学習として音読に取り組みさせていたものの、その見取りが十分にできていたとは言い難い。このラーニングアクセラレータを活用することで、AI が児童の音読を判定することができる。また、判定が必要でないものでも、取り組んだかどうかを把握することができる。

例えば、図7は英語の音読をした後に、AI が練習が必要だと判定した単語の発音練習(リーディングコーチ)に取り組む児童の様子である。また、図8は教師用の画面で、音読に取り組んだ児童の状況を把握するための画面である。

正解率だけでなく、実際に取り組んだ音声や、間違い(誤発音、挿入、省略、繰り返し等)まで把握することができる。

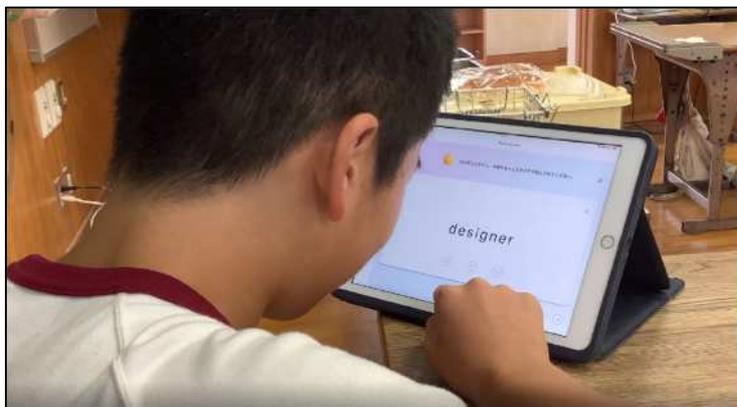


図7 リーディングコーチに取り組む児童

図8 「ラーニングアクセラレータ」の教師用画面

録音を聞くことができる

0 誤発音 3 省略
2 挿入 0 繰り返し
0 自己修正

69% 正解率 +36%
5 練習済み単語

18 1分毎の正解単語数 +99%

児童の正答率と間違いの種類

リーディングコーチで取り組んだ内容を確認

音読した内容と実際に間違えた単語

必要に応じてフィードバックできる

フィードバック

Copilotを使用してフィードバックを送信する
フィードバックの向上

担任は、児童の取り組みを確認した後に、画面右側の欄を使って、フィードバックすることができる。このようなラーニングアクセラレータの活用により、家庭で練習の難しい英語の発音はもちろん、繰り返し読ませたい国語や社会科の教科書の音読に、確実に取り組むことができ、さらに力を伸ばす音読の家庭学習に取り組めるようになった。

4 研究のまとめ

(1) 取組の検証—アンケート調査の結果から—

家庭学習「マイゴールチャレンジ」を中心にした取組について、児童はどう捉えているのか、その効果を明らかにするために、児童にアンケート調査を行った。結果は次の図9の通りである。

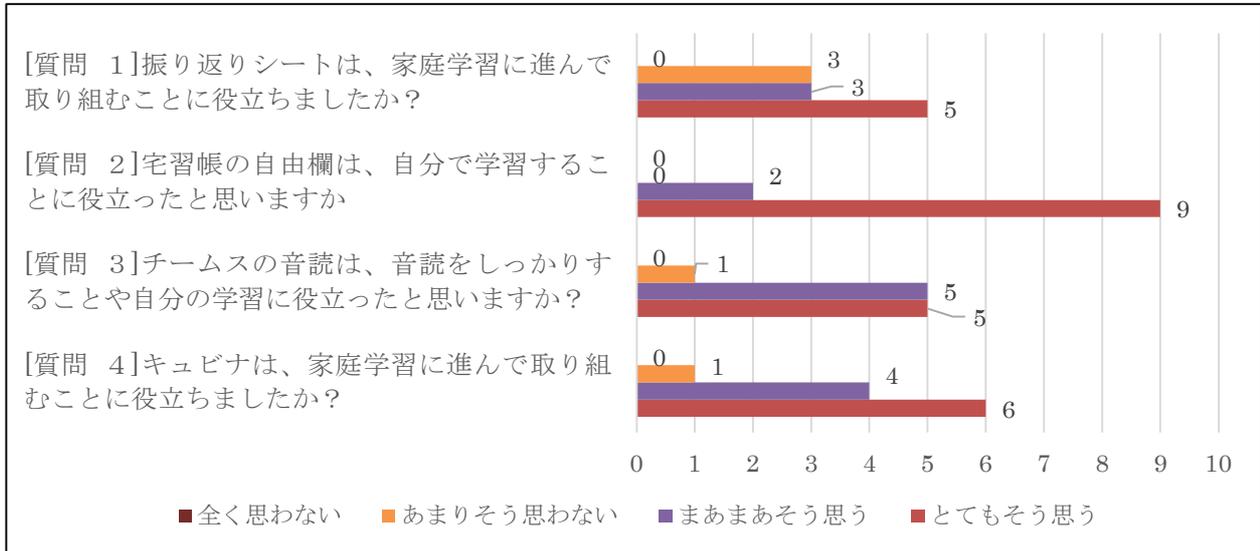


図9 マイゴールチャレンジを意識した家庭学習の取組について(n=11)

家庭学習の取組について多くの児童は、自ら取り組もうとする自学力の高まりにつながったと好意的に受け止めていることが分かった。特に、[質問2]宅習帳の自由欄については、全ての児童が「役立った」と回答しており、取り組み方や内容を自ら選べることのよさを実感しているといえる。

[質問2]の自由記述には以下のような記述が見られた。

- ・ 自分で内容を考えて取り組むので、自分ができなかったことや、難しいと思っていた学習ができるから。
- ・ 漢字検定に向けて、宅習をほとんど漢字検定のために使った。宅習のおかげで、練習問題も高得点をとることができた。本番では、間違ってしまう所は多々あったが、わかる所も増えてきたため、とても役に立ったと思う。

また、[質問3]音読の取組については、以下のような記述が見られた。

- ・ チームスがあると、音読をしようとも思えるし、最初は音読が下手だったけど、音読をやっていくにつれて、だんだんと少しずつ、上手になっていったから。
- ・ 英語の発表では、自分の発音が本当にあっているか分からなかったの、英語の場面では役に立ったと思うが、他の教科は、役に立っているかが実感できない。

これまで国語科の音読しか取り組ませてこなかったが、英語の音読の見取りを確実にできたことのよさを、子供たちも実感していることが分かった。

また、子供たちの自学力に対する自己評価は、図 11 のように変化していた。

始めたばかりのころは児童のばらつきが大きかったが、全体的に数値が向上していた。また、数値 3.00 を境に上位層と下位層に分かれており、大きな隔たりが解消されることはなかった。

ただし、下位層の 3 人の児童は決して学力が低いというわけではなく、むしろ上位層よりも平均点が高い。これは、自分に対する基準が高いことを示しているといえる。

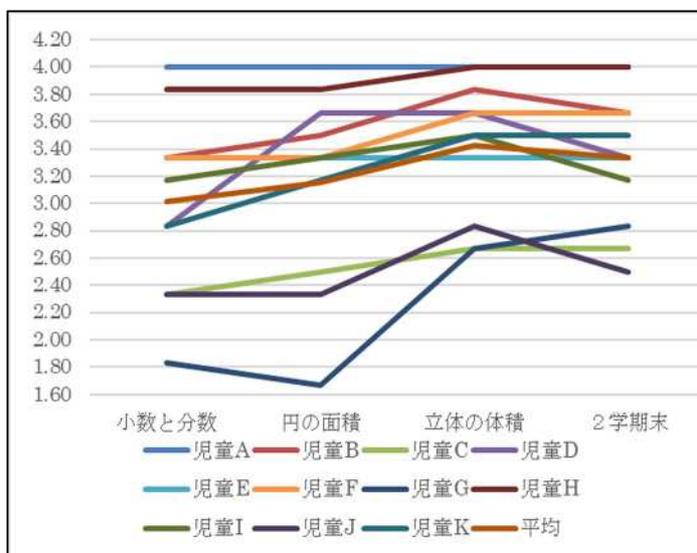


図 10 自学力の平均値の変化

本実践では、学級 PTA での呼びかけや振り返りシートへのコメントなど、家庭との連携も行った。保護者には、2学期間の取組を振り返り、我が子の自学力についてアンケート調査を行った。

図 11 から、全体的に児童に対して低い評価となったが、児童と最も差が大きかった項目は、「確かめる」であった。このようなギャップを保護者と共有することができれば、保護者が家庭学習への向き合い方を考えるきっかけになるだろう。

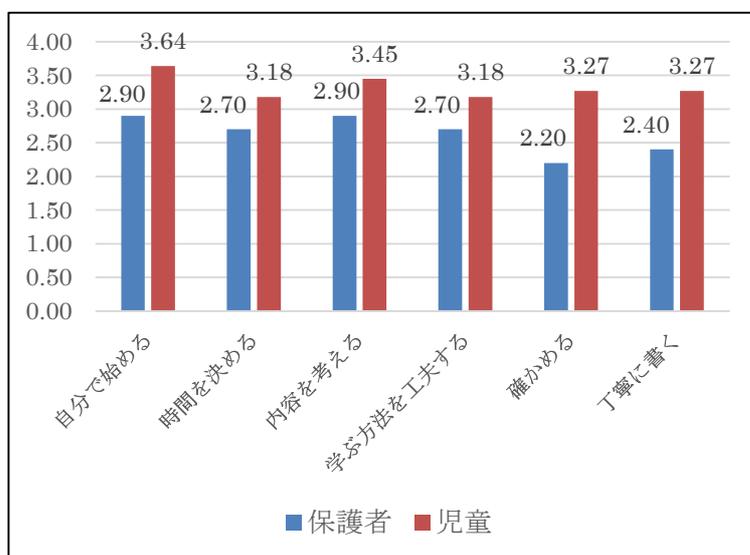


図 11 自学力の自己評価と保護者の評価

(2) 成果

本研究の成果を 2 点あげたい。1 つ目に、子供の自学力に対する意識の高まりが得られたことにある。「マイゴールチャレンジ」を設定し、意識させる場を授業や振り返りシート等で繰り返し設定することが、意識の高まりにつながったと考える。このような「自学力への意識化」は、6 年生だけではなく、その他の学年でも応用できる可能性がある。

2 つ目に、家庭との連携がより深まった点にある。振り返りシートへのコメントは保護者にとって負担になったと考えられるが、このシートをもとに普段の学習への会話が生まれるきっかけになったと好意的に受け止めるコメントをいただいた。

(3) 課題

今後の課題としては、担任する学級だけではなく、学校全体の取組へと広げていくためには、振り返りシートの準備に負担がかかることがあげられる。今の振り返りシートはエクセルを用いて開発し、入力、印刷までの準備・操作に時間がかかる。より簡単に振り返りシートを準備、印刷できるようなフォームの作成が必要である。